

③15秒未満～1分程度の回答で約7割を占めたが、浸漬させない先生も3割程度いた。

④90～100℃が多かったが、水道水を加え温度を下げて使用する先生も2割程度いた。

⑤硬化前に水洗と完全硬化後に除去の意見が半々であった。

⑥臨床研修が最多で、次いで学部教育であった。添付文書を参考にした先生がほぼいなかった。

症例に応じて手技は異なると思うが、やはり術者により操作は一律でないことが分かった。また、添付文書を参考に行っている先生が少数であった。添付文書は使用方法や注意点などが記載されていることから、使用前の熟読は必須であることの周知が必要と考えられた。

今回の結果を踏まえ、常温重合レジンに関する研究をさらに進めていく。

【謝辞】ご多忙の中、本アンケートにご参加・ご協力くださった先生方に深く御礼申し上げます。

8) Cherubism患児に対する口腔管理の1例

○田中 康裕¹, 加川千鶴世¹, 島村 和宏², 高橋文太郎²
川原 一郎², 金 秀樹², 鈴木 佑太³
(奥羽大・歯・成長発育歯¹, 奥羽大・歯・口腔外科,
鈴木歯科医院²)

【緒言】Cherubismは自己炎症性骨疾患に含まれる稀な疾患で、顎骨の無痛性両側性膨隆や眼球の上方偏位などの顔面の変形により、天使を想起させる特徴的な顔貌から名付けられた。

今回我々は、本学歯学部附属病院においてCherubismと診断された症例を経験したので、口腔外科学的診察と小児歯科学的な指導管理について報告する。

なお、今回の発表に際し、保護者の同意を得ている。

【症例】

初診時年齢：6歳8か月 女児

主訴：上顎両側第二乳臼歯の早期脱落および永久歯胚位置異常

初診時の顔貌所見：1. 左側眼窩部に紅斑 2. 眼球の上方偏位 3. 両側頬部の対称性腫大 4. 鼻根部の平低化

初診時の口腔内所見：1. E D D:早期脱落 2.

上下顎歯槽堤の頬舌側方向の膨隆 3. 口蓋の平坦化 4. 歯列弓幅径の増大と歯列弓長径の短縮化 5. E:歯頸部C1, フッ化ジアミン銀塗布
初診時のパノラマエックス線写真所見：1. 上下顎骨に多房性の境界明瞭な透過像 2. 乳歯歯根の異常吸収 3. 永久歯胚の骨内位置異常 4. 2 2:矮小化と形態異常

【経過】初診時パノラマエックス線写真より多房性の顎骨嚢胞が確認されたため、本学口腔外科に精査を依頼した。基底細胞母斑症候群との鑑別のためエックス線写真撮影と全身麻酔下にて生検を行った。その結果、Cherubismと診断し、3か月ごとの経過観察を行うこととした。

小児歯科においては、う蝕の予防と動揺歯の固定を含む経過観察が必要と判断した。以後、口腔衛生ならびに永久歯の萌出に伴う歯列咬合の育成を目的に管理を開始した。

【考察およびまとめ】Cherubismは顎骨に透過像が現れ、骨膨隆が生じ顔貌に大きな変化をもたらす疾患である。

顎骨の膨隆は思春期まで続き、それ以降、骨膨隆は停止するといわれている。顎骨の膨隆が停止するまでの間、口腔内では歯の動揺や脱落といった症状が出現し、それらの症状を緩和するために経過観察と対症療法が必要となる。患児はこれから思春期を迎えるため、自分の顔貌の変化に伴って保護者とともに戸惑いや不安を感じると思われる。

今後も患児と家族の意向をくみとりながらサポートを続けていきたいと考えている。

9) Lesch-Nyhan症候群と診断された患児の症状と経過

○舟山 敦雄, 田中 康裕, 関野 貴大, 神庭 優衣
永山 道代, 加川千鶴世, 島村 和宏
(奥羽大・歯・小児歯科)

【緒言】Lesch-Nyhan症候群は核酸代謝酵素の遺伝子変性による伴性潜性(劣性)遺伝である。全身所見として不随意運動、精神発達遅滞、高尿酸血症があり、歯科的所見では口腔粘膜の咬傷が特徴である。今回、Lesch-Nyhan症候群患児に対し歯科的管理を行う機会を得たのでその概要を

報告した。今回の発表に際し、保護者の同意を得た。

【症 例】

初診時年齢：1歳9か月，男児

主訴：下口唇裂傷の精査・加療

初診時の顔貌所見：右側下口唇の一部欠損，および潰瘍が認められた。

初診時の口腔内所見：上下顎両側第一乳臼歯まで萌出している。上顎右側乳中切歯と乳側切歯は癒合歯であった。上唇小帯の高位付着が認められた。

【経 過】初診時は発熱や気管支炎などによるストレスを期に自傷行為が頻発していたため，対応策としてマウスガードを製作した。その後，5か月間来院が途絶え，下顎右側乳犬歯の動揺を主訴に再度来院した。この間マウスガードは装着できていなかった。再来院時は下顎右側乳犬歯をエナメルボンドシステムにて固定を行ったが，後日抜歯となった。以降は上顎へのマウスガードを製作しながら経過を観察していたが，次第に印象採得に苦慮するようになり，全身麻酔下でう蝕の治療を含め，印象採得を行うこととした。現在も上顎へのマウスガード製作を行いながらPMTC，フッ化物塗布を行いつつ経過を追っている。

【考察およびまとめ】Lesch-Nyhan症候群患者は2歳頃から自傷が認められるとされている。患児は11か月頃から自傷が認められた。その後一度は軽快したが，1歳7か月頃から頻繁に起き始めた。自傷行為は体調不良や日常生活の精神的緊張で発現していたが，マウスガード装着後は下唇の欠損に繋がる自傷行為には至っていない。今後も注意深く観察しながら口腔管理を行っていきたいと考えている。

10) 虚血再灌流モデルラット歯髄のフリーラジカル産生

○鹿内 陽樹¹，住谷 雅²，鈴木 智子³
安部 仁晴²，渡邊 弘樹²

(奥羽大・歯・学生¹，奥羽大・歯・生体構造²)

【目 的】虚血再灌流障害は，虚血による酸欠状態から血流の再灌流がおこり，フリーラジカル(活性酸素，一酸化窒素)が産生されることにより引き起こされる。これまで虚血再灌流障害は，主に

中枢神経系において検索されてきたが，口腔周囲器官における虚血時間と障害について検討した報告は少ない。今回我々は虚血再灌流モデルラットを用い，歯髄における活性酸素と一酸化窒素の発現を活性酸素合成酵素(Nox)と一酸化窒素合成酵素(NOS)の局在から検討した。

【材料と方法】材料には6週齢Wistar系雄性ラットを用いた。モデルラットの作製は，麻酔下にて左側総頸動脈を剖出，木綿糸により結紮後(結紮時間：60，120分間)，いずれの群も再灌流を60分間施した。方法は，4%パラホルムアルデヒド溶液にて灌流固定，第一臼歯を含めた下顎骨を摘出後，10% EDTA溶液にて脱灰操作を行った。その後，パラフィンにて包埋し，連続切片を作製，通法により免疫組織化学的染色を行った。

【結 果】正常ラット歯髄では，iNOSとeNOSが一部の血管に発現していたが，Nox1, 2, 4およびnNOSの発現は観察されなかった。これに対して，虚血再灌流モデル60分結紮群では，iNOSとeNOSに陽性を示す血管が正常ラット歯髄と同様にみられ，加えて，Nox1, 4, nNOSおよびeNOSの発現が象牙芽細胞に観察された。結紮120分群でも象牙芽細胞においてNox1, 4, nNOSおよびeNOSが発現しており，60分群に比べ陽性を示す象牙芽細胞数は増加していた。

【考 察】虚血再灌流モデルラット歯髄において，Nox1,4,nNOSおよびeNOSの発現が観察されたことから，活性酸素と一酸化窒素が多量に産生される可能性が示唆された。加えて，活性酸素と一酸化窒素は，再灌流後の早期に，象牙芽細胞を障害する可能性が考えられた。

11) フッ化物配合口腔保湿剤によるエナメル質再石灰化効果の検討

○南 健太郎
(奥羽大・歯・口腔衛生)

【要 約】現在の日本は超高齢社会を迎えており，齲蝕予防は口腔保健上重要な課題である。齲蝕病巣の再石灰化にはフッ化物の局所応用が有効とされているが，再石灰化に必要なミネラルであるカルシウム塩やリン酸塩は主として唾液から供給される。唾液分泌が減少するとそれらの供給が減少